様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２２２０

研究課題名（和文）文明社会認識の多様性に関する思想史的研究

研究課題名（英文）Diverse views on civil society: An approach to intellectual history

研究代表者
小島　秀信（KOJIMA, Hidenobu）

同志社大学・商学部・准教授

研究者番号：１０７３５２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アダム・スミスやエドマンド・バークといった１８世紀イギリスの政治経済思想家の文明社会観を明らかにし、フランス革命を経て封建社会から近代社会へと至るという通俗的な「文明化」とは異なるもう一つの文明化の在り方を思想史的に討究した。そのためにイギリスの大英図書館の調査や学会報告などを行い、研究を洗練化させ、研究成果として複数の論文を完成させることができた。また、その２０世紀における影響として、M・ポランニーの最晩年の書Meaningの翻訳プロジェクトも進めることができ、その出版を通じて研究成果の一部を社会に還元したいと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　封建社会からフランス革命を経て近代社会へという史的構図はいまだに通念として義務教育等で教えられているが、学術的には、市民革命を経ることなく近代化することに成功したイギリスなど、その構図に収まりきらない事態が存在しており、それが重要な問題となっていた。イギリス下院議員エドマンド・バークは、封建的なるものと近代的・商業的なるものとを融和的に捉えており、彼の思考様式を解明することは、まさしく封建社会と革命的断絶を経ることなく近代化することに成功したイギリス社会を把捉し、理解する上でも極めて重大な意義を有するものであろう。本研究の学術的社会的意義はそこにあると言ってよい。

研究成果の概要（英文）：During this research, I shed light on the ideas of civilized society held by 18th century politico-economic thinkers such as Adam Smith and Edmund Burke, thereby revealing and describing, in terms of the history of ideas, another form of the civilization process differing from the common view of “civilization” from feudal to modern society through the French Revolution. I conducted research at the British Library, gave reports at academic conferences, and so forth, in order to achieve this. I refined my research, and was able to complete several papers as the results of my studies. I was also able to make progress in my project to translate M. Polanyi’s final work, Meaning, which presents the influences of the above findings in the 20th century. I hope to deliver some of the fruits of my studies back to society through publication of this translation.

研究分野：思想史

キーワード：バーク　スミス　M・ポランニー　文明社会　自生的秩序

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

封建社会からフランス革命を経て近代社会へという史的構図はいまだに通念として義務教育等で教えられているが、学術的には、市民革命を経ることなく近代化することに成功したイギリスなど、その構図に収まりきらない事態が存在しており、それが重要な問題となっていた。

そのため、封建貴族と金融資本の融合などを歴史的に討究したジェントルマン資本主義論などの議論も現れたが、思想史的には、イギリスの著名な政治思想史家Ｊ・Ｇ・Ａ・ポーコックが、こうした封建社会と近代社会の連続性を見る思想家の一人として、１８世紀イギリスの下院議員エドマンド・バーク（1729-1797）を発掘した。

フランス革命に猛反発していたバークは、「紳士の精神と宗教の精神（the spirit of a gentleman, and the spirit of religion）」という封建的エートスこそが近代商業社会を支えていたのだと論じ、封建的なるものと近代的・商業的なるものとを融和的に考えていた。その思考様式の重要性を最初に指摘したポーコックであったが、なぜバークが近代商業社会に封建的なエートスが必要だと考えていたのかについて、深く討究することはなかった。しかし、この論点は、市民革命を経ることなく近代化しえたイギリス人による≪自己認識の歴史≫でもあったイギリス政治経済思想史を理解する上で極めて重要な論点であり、英語圏では米政治学者オニールなどがポーコックの問題意識を引き継いで、近代主義対封建主義の対立ではなく、別々の近代観の対立としてウルストンクラフトとバークの政治論争を描くなど、現在、欧米のバーク研究の最先端のトピックスの一つとなっている。

封建的なるものと近代的・商業的なるものとを融和的に捉えるバークの思考様式を解明することは、まさしく封建社会と革命的断絶を経ることなく近代化することに成功したイギリス社会を把捉し、理解する上でも極めて重大な意義を有するものであろう。

しかし、ポーコックにせよ、オニールにせよ、政治学者であった以上、あくまで政治学の観点から見たバーク研究であり、封建的エートスと商業社会の関係についてはほとんど討究されていなかった。政治思想史と経済思想史の境界領域を討究する本研究代表者は、ポーコックの問題意識を引き継ぎ、この封建的エートスと商業社会の融和というバークの特異な思想を討究し、『伝統主義と文明社会』（2016 年）としてまとめた。それは、商業社会と封建的エートスの関係を討究したバークのモノグラフという点では欧米でも類書はないものであった。

このように、バークの文明社会論を中心に、多様な文明化の在り方を思想史的に検討する本研究のテーマを実効的に進めるための下準備を着々と進めてきた。

２．研究の目的

バークの文明社会認識と同時代人たちの文明社会認識との比較については、特にアダム・スミスとの関連で、海外でも先行研究は幾つかある（Donald Winch, *Riches and Poverty: An Intellectual History of Political Economy in Britain, 1750-1834*, Cambridge University Press, 1996. Anna Plassart, *The Scottish Enlightenment and the French Revolution*, Cambridge University Press, 2015.など）。また、本研究代表者もその点については、『伝統主義と文明社会』（2016 年）の【資料】として、スミスとバークの思想的関係に関する内外の研究史のサーベイを行ったり、スミスの『道徳感情論』についてバークが書いたスミス宛書簡と書評を訳出したりと、基礎的な作業を進めてきた。

私見では、バークの文明社会観の特徴の一つは、封建的社会観と近代的社会観の有機的併存というものであるが、封建制に対するネガティブなイメージが強い国内においても看過されてきたし、海外でも過小評価されてきた。この点を大英図書館での調査などを通じて、同時代人たちとの影響関係やバークの思想的淵源などをさらに詳しく研究して、論文として発表することが一つの目的である。

また、伝統的観念の重視を前提とした自由社会、市場社会の擁護というバークの政治経済思想は、伝統主義と大社会＝文明社会、市場社会を両立するものとして描き、「バーク主義的ホイッグ」を自任していた 20 世紀のＦ・Ａ・ハイエクや、伝統主義に立脚しつつ自由社会を擁護し続け、「科学のバーク」と呼ばれたマイケル・ポランニーなどの現代自由主義思想にも――変容を被りつつも――引き継がれており、重大な影響力を有してきたことは言うまでもない。その意味では、このバークの論点は 18 世紀に限定されない。20 世紀自由主義思想におけるバークの意義を理解するために、バークの社会観とハイエクやポランニーの社会観を比較分析することももう一つの目的である。

したがって、本研究は、バークの文明社会認識がいかなるものであったのか、そしてそれがどのような影響を 20 世紀の思想界に与えてきたのかを明らかにしようとするものであり、特に、ハイエクとポランニーにポイントをしぼって検討することを目的としている。

本研究は、封建社会から市民革命を経て近代社会へという通念的歴史観とは異なる思想系譜を追究していこうとするものであり、これまでは、反革命思想・保守思想の研究と結び付くこともあって、あまり討究されてこなかった。しかし、この点は繰り返さねばならないが、イギリス政治経済思想史の特色を考える場合、避けては通れぬ研究テーマであると考える。

３．研究の方法

① バークの文明社会観について

バークについては『伝統主義と文明社会』においてかなり詳細に論じているが、本研究では大英図書館での蔵書目録などの分析を行い、それから得た知見をベースに自説をさらに補強して論文を完成させる。特に封建制観念――騎士道や階層制――と文明社会を結びつける思考様式はアダム・ファーガスンと酷似していると推測していたし、オニールなど鋭い研究者もそのように論じていたが、蔵書目録でその点についても確認できた。バークの封建制観念の淵源は『イギリス史略』のゲルマン社会論にあると考えているが、その基本構想にあるのがタキトゥスの『ゲルマニア』であったということについて、蔵書目録からも確認できた。バークの騎士道論の根源にあるゲルマン社会論の分析はバークの文明社会論においても極めて重要だと考えている。アメリカ革命期とフランス革命期の対応の違いがバーク問題として長らく議論されてきたが、バークの封建制観念を理解すれば全く問題となるものではないことが分かる。その点についても『伝統主義と文明社会』で少し展開していたが、国際的にも指摘されていない視点であったので、英語論文として公表する準備を整えていく。

② バークの文明社会観の 20 世紀における影響について

20 世紀を代表する自由主義者の一人ハイエクに関しては、国内外では驚くべきことに、「バーク主義的ホイッグ」とハイエクが自己規定していたにもかかわらず、バークとハイエクの比較思想研究はほとんどされてこなかった。バークとハイエクの比較思想を試みたのは世界的にはレーダー（Linda C. Raeder, The Liberalism/Conservatism of Edmund Burke and F. A. Hayek: A Critical Comparison, *HUMANITAS*, Volume X, No. 1, 1997）が先駆であったが、国内では本研究代表者による「伝統主義と市場主義――バークとハイエク」（『経済社会学会年報』経済社会学会、第 30 号、2008 年）や「伝統・市場・規範性――エドマンド・バークと F・A・ハイエク」（『政治思想研究』政治思想学会、第 11 号、2011 年）が先駆であったと思うが、伝統的習俗を基盤とした自由経済を唱えたバークとハイエクについて、どこまで共鳴し、どこで食い違うのかという点についての精緻な研究はまだ発展途上であると思われる。ハイエクは『自由の条件』で保守主義を批判したが、それはバーク主義とイコールではなかったことは言うまでもないし、ハイエクは制度の自生性、つまりは自生的秩序の思考をイギリス思想や保守主義から学んだと論じていた。ハイエクの自生的秩序の概念がどこから来たのかについては、いまだに海外では多様な議論が噴出しているが、ハイエクやレプケと共に先駆的に自生的秩序の概念を提起したのがマイケル・ポランニーであった。マイケル・ポランニーも「科学のバーク」と呼ばれて、伝統主義と自生的秩序論、自由社会論を結びつけて考察していたが、その思想構造に至ってはほとんど日本では無視されている。ハイエク以上に研究状況は惨憺たるありさまであったので、マイケル・ポランニーの思想分析、特に彼の自生的秩序論の分析を進め、先行研究も調査して論文として発表していく。

４．研究成果

2018 年度　先行研究の分析

バークやポランニーに関する内外の研究書を収集し、分析を行った。特にポランニーの社会論や経済論に関して海外でもようやく研究が進んできたので、その知見を踏まえて論文「マイケル・ポランニーにおける暗黙知論と市場システム論の論理的関係性」を発表した。また、バークに関しても、論文「エドマンド・バークの政治経済哲学とその現代的意義」を発表し、バークの封建制観念が自由社会において有する意義について論じた。

2019 年度　研究結果の公表

ハイエクやポランニーの自生的秩序論についての研究成果を経済社会学会で「暗黙知と自生的秩序」として報告し、同分野ないしは異分野の研究者たちから有益な示唆を受けた。また、ポランニーの最晩年の書 *Meaning* を共訳し、出版社に初稿を提出した。ミーニングはポランニーの社会哲学が暗黙知論から自生的秩序論、宗教論まで幅広く展開されており、ポランニーの意義を社会に広め、研究状況を改善させるのに最適であると判断したからである。その解説も執筆した。また、バークに関しても自説を海外に問うてみるために、英語論文を執筆し、海外ジャーナルに投稿中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小島秀信	４．巻 14
２．論文標題 エドマンド・バークの政治経済哲学とその現代的意義	５．発行年 2018年
３．雑誌名 吉野作造研究	６．最初と最後の頁 64-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小島秀信	４．巻 70巻4・5号
２．論文標題 マイケル・ポランニーにおける暗黙知論と市場システム論の論理的関係性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 同志社商学	６．最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小島秀信	４．巻 71巻2号
２．論文標題 【書評】百木漠著『アーレントのマルクス』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 同志社商学	６．最初と最後の頁 109 - 115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小島秀信
２．発表標題 暗黙知と自生的秩序
３．学会等名 経済社会学会全国大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考